

不審者

不審者とは

サングラスをかけ、マスクをして、黒っぽい服を着ているのが**不審者**。こんな先入観が犯罪を許すことになる。不審者には思えないような不審者が出現した場合、先入観からその人物への警戒心を解いてしまう可能性があるからである。では、そもそも不審者とはどういった人物をさすのだろうか。

目で見て、「様子がおかしい」「へんだ」と思うことが不審と感じる最初である。では「何が」おかしいのか。普段車が止まらない場所に長時間車が止まっている、学校のそばで普通なら学校や会社に行っている年代の人物が学校のほうをじっと見ている、その場所にふさわしくない服装をしている、このような例はやはり「おかしい」といえる。これらのことから、不審者とは、**その場所に合わない、その時間にふさわしくない人物**をさすといえるだろう。それらの人物に出会い、「おかしい、不自然だ、なぜだろう」などの疑問が起こることが不審者を認知する第一歩になる。

犯罪者は捕まらないように、目立たないようにと行動するものである。不審者も同様に、目立たないでたちで人目を避ける行動をとる。したがって、明るい色や目立つ服装は避けるはずである。要するに、ごく一般的な見た目でありながら、何かおかしいと思わせる行動やたまたま読み取らなくてはならない。そのためには、普段から何事も意識して見るという習慣、訓練が必要になってくる。同じ情景を見ても、意識して見ると見ないでは、不審者を見分ける力にも差が生じてくるのである。

危ない人

「子どもの安全はこうして守る」グラフ社より抜粋

危ない人とは、不審者以上に「危ない、加害者すれすれの人」をいう。不審者には注意することが必要であるが、危ない人には近寄らない、近寄せない、逃げる等の行動が必要である。危ない人とは以下のような人物をいう。

① 変に近づいてくる人

② 変に後をついてくる人

③ 目を合わせない人、なれなれしく話しかけてくる人

④ 何も関係ないのに親切を無理やり押しつける人

⑤ 裏通りや公園等、人目のつかないところに誘う人、人の目に届きにくい場所、隅っこに誘う人

⑥ 理由もなく個人の情報を知りたがる人

不審者情報とこれからの課題

インターネットで配信されている警視庁等の不審者情報には、単に道をたずねたり、善意で声をかけたりした行為等が含まれている可能性がある。このため、善意の声かけが誤解され、思わぬ事件に発展したケースがある。次に示す事件は、人を外見で判断し、思い込みが強すぎ、不安が飽和状態になったときの通報者のおちいりやすい心理を表しているといえる。(以下、『子どもが出会う犯罪と暴力 犯罪対策の幻想』生活人新書より抜粋)

平成17年7月、奈良県で、道ですれちがった母子に「誘拐するぞ」と声をかけ、脅したとして大学職員が逮捕され、6か月後に起訴された。大学職員は「幼児が前方から一人で走ってきたので、そのまま走ったのではバイクにぶつかると思い、右手を横に差し出して、一声かけて幼児の走るのを止めた」という。その後、幼児の後方にいた人を母親と思い、子どもの安全に意識を促そうとして「目をはなさず、手はなさず」と通りがかりに声をかけていったと語っている。ところが母親は、外側が上がり上がったサングラスをかけた大学職員がふつうではないと感じ、一番近づいたときに「誘拐するぞ」とびっくりするような声でいわれたと証言している。(中略)

サングラスの印象が不安と結びつき、怖いことをされるかもしれないとの恐れに転化し、大学職員が腰をかかめて子どもの前に手を出した姿が子どもを抱きかかえるように見えて、誘拐される！という思い込みになっていった心理のプロセスを想像させる。

この事件は結局、平成18年10月に一番で無罪判決が出て検察が控訴を断念し、無罪が確定している。